

---

# ノープラントラベル

夙多史

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ノーブラントラベル

### 【NZコード】

N4489R

### 【作者名】

夙多史

### 【あらすじ】

この物語は卒業旅行で九州を旅する大学生四人の様子を淡々と描くノンフィクションです。過度な期待はしないでください。また、短編となっていますが普通に長いです。

## (前書き)

この物語は卒業旅行で九州を旅する大学生四人の様子を淡々と描くノンフィクションです。過度な期待はしないでください。また、短編となっていますが普通に長いです（ホントは分割した方がよかつたんだけど）。

## 【卒業旅行しようつや】

大学の卒業研究発表会を終えて一田日の夜、友人からそんな内容のメールが届いた。

【メンツは？】

と私はメールを返す。

【いつものメンバー】

すぐにそう返ってきた。やっぱりか、と私は思った。

それにしても私たちが卒業旅行なんて青春をやるなんて考えてもいなかつた。基本的に『いつものメンバー』に含まれる四人は、どつか遠くに遊びに行ったりはもちろん、飲み会すらやらない面子なのだ。

だからこそ、卒業旅行くらいはやつて思い出を作つておこうという話なのだろう。

【いいけど、どこに行くん？】

【まだ決まってない。とりあえず沖縄か北海道行くんやつたら飛行機が十日前までに予約せんとおえんから、今日くらいやないとあかんけど、どうします？ あと予算とかも決めてないからなんとも言えんけど、実際どのくらいまでとかつてある？】

エセ関西弁のような独特な言葉遣いで返信してくる友人。突然言われても答えが出るはずがない。

【とりあえず、これから三ツシーんとに遊びに行くから、そんときに相談して決めよう】

【了解】

十分後、近くのコンビニで卒業旅行をしようと言い出した友人（以下、発案者ということ）で『リーダー』と表記する）と会流した。そして適当な買い物をしてから、我々は大学へと向かった。

なぜ大学か？ 理由は簡単だ。これから遊ぶ予定になつていてる人は、卒研発表が終わつていても関わらず研究室に入り浸つているからだ。ていうか住んでいる。最近では研究室を『家』と呼び、借りているアパートを『物置』と呼んでいるほどだ。

私たちが研究室のドアを開けると、そこでは数人の学生がトレーディングカードゲームに興じていた。うん、いつもの光景だ。彼らは研究室の学生ではない。一人隅のパソコンを起動し、ネットでカードのことを調べているデュエリスト 我々がこれから旅行の相談をする友人の後輩たちである。

「やあ」

回転椅子を回し、とても軽快な口調で挨拶する友人。あだ名はヨッシー。某ヒゲの配管工を背に乗せる緑色の恐竜を彷彿とさせるが関係性はない。

「旅行どこ行く？」

と開口一番に訊きたかったが、とてもそんな雰囲気ではない。遊なんちやら王をメインにドイツ語で白黒やギャ やデュ マなど、多種多様なカードゲームの話で盛り上がつていて。ちなみに私はヤザくらいしかわからない。

なんかリーダーが隣のパソコンで昔懐かしのゲームをプレイし始めたので、私も最近買ったRPGすることにした。

深夜になつたところで、ようやく旅行の話を持ち出すことができた。

「どうか行きたいことがあるん？ ていうか、なにしたい？」  
リーダーがそう切り出すと、

「他の地方のカードショップ巡つて仲間と出会いたい」と根っからのデュエリスト もといヨッシーが割と真面目な目

をして答える。「冗談ではなく、彼にとつてそれは観光名所を回るよりも興味があることなのだ。私もリーダーもカードゲームを嗜んだことはあるので、あえてその意見は否定しない。」

「東京とか大阪は就活で行きまくったから却下な。あと海外は論外」「わし、春から東京住むから首都圏は嫌だ」

就職の決まつているリーダーが私に同意する。就職先の決まつてない私にはなんて羨ましい言葉。いいさ、そのうち作家になるから!「イメージしろ、卒業旅行と言えばどこ?」

テレビ東京系列で朝八時から放送しているカードアニメみたいな口調で、ヨツシーが後輩の一人に質問する。後輩は戸惑った様子で、「草津、とか?」

と呟いた。

「おお、温泉! いいね、草津! .....草津ってどこだっけ?」

ヨツシーの疑問にパツと答えられる者はいなかつた。

たまたま電子辞書を持っていた私が広辞苑で『くさつ』と入力してみる。

『滋賀県南部の市。東海道・中山道の分岐点で宿場町として発達。東海道五十三次の一。人口十万一千』

「滋賀県だそうです。琵琶湖見よう、琵琶湖」

目的は温泉で場所は草津、そんな感じに決まつてこの日は終了した。

だがその後、温泉で有名な草津は群馬県だと知り、卒業旅行の案は振り出しに戻るのだった。

別の日。

私は先日の会議に参加できなかつた友人と本屋に行くこととなつた。恐らく本人の知らないところで『ダビ』というあだ名がついている友人は、なんでも卒研のせいで買えないでいたマンガや小説をまとめ買いするらしい。

私は特に買いたい本などはなかつたのだが、なにか愛読書の新巻が発売されているかもしれないと期待して彼の誘いを受けたのだ。というか、本屋好きだから買うものなくたつて構わない。

「旅行の件、どうする?」

買い物がてら、私はダビに尋ねてみた。

「……東京がダメなら、やっぱ京都とかどう?」

「京都かあ。中学の修学旅行で行つたことあるからなあ

「……おれもある

「あるんかい!?」

じゃあなぜ提案したんだ。『いつものメンバー』の中で彼の思考や行動が一番理解できない。今は行く方向で話は進んでいるが、彼は行けなくなるかもしれない。というのも、大学三年の夏にみんなで海行こうつていう初めての提案をした時、海パンまで買いに行つたのになぜかドタキャンしやがつた前科があるからだ。

「……いや、なんかまた行つてもいいかなって

「まあ、アリではあるけど。中学ん時どこ回つたつけ? 一一条城は行つた……あー、清水寺は行かなかつたな」

「……おれは行つた」

勝ち誇つたように、ダビ。ちょっとウザつたく思った瞬間である。テーマは一応『温泉』つてことになつてゐるけど、京都も候補には入れておこう。

その夜、再びヨッキー宅(研究室)へ赴き、行つたことないからという理由で九州という案に決定した。

一泊三日。行先は大分県の別府と、トラベルセンターの人の口車

に乗せられて博多ということになった。

?

～一日目～

一月二十八日 月曜日 午前八時三十分

天候は雨……なんという絶好の旅行日和だ。そんな素晴らしい天気に嘆きながら私が駅に到着すると、そこには既に『いつものメンバー』が揃っていた。

マスクを着用し、無難な大きさのバッグを肩に掛けているリーダー

（重度の花粉症）。

巡り合いを諦めず、家宝のTCGを一箱詰めてきたヨッシー（重度の花粉症）。

執筆用のノートパソコンに着替え、その他必要品しか持つてこなかつた私（軽度の花粉症）。

今回はドタキヤンすることもなく大小二つのバッグを手にするダビ（鼻炎）。

体調も万全、天気も良好、と内心で皮肉りながら私が管理していた人数分の切符を皆に手渡す。これから新幹線に乗つて福岡県の小倉まで行き、そこから特急に乗り換えて別府へ向かうのだ。

新幹線の時間は八時四十四分。もうあまり時間はない。私たちは急いで改札をくぐ

ダビが改札に引っかかった。

「なんしとんアレ！？」

リーダーはご立腹である。一・二度ほど改札に抜けることを拒絶されたダビは、駅員さんに従つてようやく我々と合流することができた。

どうしたのかと訊くと、

「……一枚ずつ切符入れてた」

そりやあ改札も嫌がるに決まつていて、新幹線に乗るには『乗車券』と『新幹線特急券』の一枚の切符が必要で、それらを同時に改札へ入れなければならない。初めて乗るのならばそのミスもわからぬでもないが、ダビは就職活動等で幾度となく特急や新幹線を使つているはずだ。なぜミスつたし。

初つ端からいきなりダビが天然ボケをかましてくれたが、新幹線にはどうにか間に合つことができた。

指定された席へ座り、椅子を回転させて向かい合つ形を取る。ダビが「……後ろ向き嫌だから変わって」と訴えるのを華麗にスルーし、私たちは重大な問題点について議論することにした。

「で、別府に着いたらなにする？」

そう、交通手段や宿泊以外、我々は全くのノープランだった。しかも四人全員がこういうことには優柔不断であるため、放置していたら絶対に決まらない。行先がはつきり決定するのにも何日もかかつくくらいだ。

ヨッシーの友人が言つていた。『ノープランはきつい』と。

そこで私は前日に仕入れた旅行ガイド雑誌を取り出す。隣に座っているリーダーが「貸して」と言いつつ私の手から雑誌を奪い取つてバラバラと捲り始めた。

それを横目に、今度は別府の観光地を私が適当に調べて印刷した束を取り出す。それを見ながら、いくつかの選択肢を掲示した。

- 1・別府と言えば地獄めぐり
- 2・近場の水族館
- 3・城島の高原パーク
- 4・アフリカンなサファリパーク
- 5・ホテルで豪遊

最後のはジョークとして、皆は一様に窓の外を見やる。九州も、雨らしい。

「……サファリはなしだな。雨だから動物いなって」  
「まあ、そこは端から却下したい。往復と入園料だけで五千は飛ぶ」「高原パークってなにがあるん?」  
「ほら、ちょっと調べた時にヨッシーが楽しそうって言つてたやつ」  
「覚えがないのか首を傾げるヨッシーに、私は車のハンドルを握るジェスチャーをする。

「ゴーカートやん!」

リーダーの回答にヨッシーは思い出したように笑つた。  
「やべえ、ゴーカートめっちゃ楽しそう!」

「あんただけや」

リーダーとダビが微妙と思つていたらしく、高原パークは除外。  
私は遊園地でもよかつたけどね。雨じゃなければ。

「とりあえず、メシなんやけど」

リーダーが微妙に論点を変える。そうだった、その辺も考えなければいけない。

ガイド雑誌のとあるページをリーダーが開き、指差す。

「とり天にしようや」

珍しくパツと意見が出た。一応他のグルメを見ると、冷麺とお高い豊後牛……季節と貧乏学生の身分を考えればとり天しか選択肢はなかった。

店は一軒載つているが、私たちは駅に近い方を選んだ。

さて、昼食が決まったところで問題の『なにをするか』である。皆でうんうん悩んでいるうちに、新幹線は九州へ突入する。ところで

「せっかく別府に行くんやから温泉めぐりとかしたいな

「ああ、リーダーが選択肢を増やした……」

でもせっかく出してくれた意見だ。そこは汲むべきだろ。ズバツと決めてしまわなければ、小倉に着くまでに終わらない。

誰かが言つてしまえば、反対意見はこない。そんなメンバーである。

「じゃあこうしようか。今日はホテルでも温泉入るから、温泉巡るのは明日にしよう。そんで、今日は地獄めぐり。幸い、微妙に晴れて来たし」

再び窓の外を見る。灰色の雲の隙間から、僅かに青色の空が覗いていた。

「来たぜ別府！！ ビバ 別府！！」

目的地に到着するや否や、ヨッシーが周囲の注目を集めない程度に叫んだ。

私たちは不要な荷物を西口のコインロッカーに仕舞うと、駅の東口の方へと出る。昼食を取る予定の店はそちら側にあるのだ。

「おお、手湯がある」

「流石別府やな」

「ビバ 別府！！」

「……」

駅の東口には、こういう場所でよく見かける噴水の代わりに手をつけるためのお湯が湧き出す場所があった。早速手をつけてみる私たち。だが

「見てアレ、一人だけ一切手湯に興味を示していない奴がいる

ダビである。

「どうした？　いつち来ればいいじゃん」

ヨッシーの呼び掛けに彼は反応しない。ただじっとまらなそうに油屋熊八の像を眺めていた。まあ、興味ないならいいけど。

ダビの空気を読まない奇行はいつものことなので、私たちは特ににか言つわけでもなくこの付近にあるはずの居酒屋を探す。居酒屋と言つても、とり天定食はランチメニューなので昼間も開いているはずだ。

実は朝からなにも食べていらない私は空腹が絶頂に来ている。とり天……雑誌のイメージ写真を見るだけでヨダレガデマス。

店、定休日でした。

「もう一軒の方行こう！  
リーダーの号令に異論を唱える者はいない。

十分ほど歩いて小さな商店街の中にあるラーメン屋へと辿り着く。そこはちゃんと営業していて安心した。

昼食のとり天定食に舌鼓を打つている間に、リーダーが携帯でなにか調べていた。そしてわかったことをヨッシーに告げる。

「こつからちよつと行つたとこにカードショップあるで」

「よし行こう

打てば響くように可決され、街を観光がてらやや大回りして駅に戻ることとなつた。

が、見つけたカードショップはびつ見てもやつてなぞうな寂れた家屋だった。

忘れてはいけない。

我々の半数以上が花粉症で苦しんでいることを。

新幹線内で決めた予定通り、私たちは別府名物の地獄めぐりをすることとなつた。

別府地獄めぐりとは、この地方に存在する様々な奇觀を呈する自然湧出の源泉『地獄』を、徒步やバスなどで周遊する定番の觀光コースのことである。海地獄・鬼石坊主地獄・山地獄・かまど地獄・鬼山地獄・白池地獄・血の池地獄・竜巻地獄の八種類があり、血の池と竜巻以外はほぼ一ヶ所に集中している。そのため、私たちはず六ヶ所を徒步で回ることにした。

ティッシュペーパーの箱片手で。

### 山地獄

受付のおばちゃんに苦笑で見送られて最初の地獄に入った。

ここには若山の山裾付近の各所から吹き上げる水蒸気の熱を利用して、動物園ほどではないがカバやフラミンゴなどの動物が飼育されている。ミニ動物園と言つたところだ。ゾウの圧倒的な巨体にリーダーが「うおっ！？」と吃驚していた。

山に近いためか、花粉症が悪化してリーダーとヨッシーのクシャミが止まらない。

### 海地獄

コバルトブルーとでも言うべき美しい青色の温泉が広がっていた。一見涼しそうな印象を受けるが、その温度は九十八度。カツプ麺が作れる。

温泉卵を食べてもよかつたが、昼食後といふことでデザート系ならまだしもなにかを食す気にはなれなかつた。それにしてティッシュの減りが半端ない。

## 鬼石坊主地獄

セメントのような色をした熱泥がコポコポと吹き上がる地獄。やばい。なにがやばいって？ そろそろ観光に余裕がなくなるほどリーダーとヨッシーの花粉症が悪化している。

プリンやソフトクリームを食べて小休止することで、クシャミの頻度は少し減った気がした。

## かまど地獄

「リーダー！ これ花粉症に効くって書いてある！」

例によつて受付のお姉さんに苦笑で送られて入つた地獄で、ヨッシーがそれを見つけた。

かまど地獄は他の地獄を総合したような感じであるが、そこにつに水蒸氣のみが噴射している場所があつた。張り紙で『ゆっくり吸つてください』みたいなことが記述されており、インフルエンザ予防や花粉症に効果があるらしいこともわかつた。

早速我々は水蒸氣の中に顔を突っ込んだ。思ったより熱くはなく、硫黄の臭いがきつい。良薬口に苦しむことで我慢して鼻で息を吸う。

……特に変化はない。そりゃあすぐには効きませんよね。

## 鬼山地獄

ワニがいた。大量にワニがいた。白緑色の池とかあつたけど、なによりもワニに目がいつてしまつ。

様々な種類のワニが約百頭 まったく動く気配がない。どうやらお昼寝中のようだ。それなのにリーダーは「うひゃつ！？」と過剰にビビッていた。

そのリーダーが私にそつと耳打ちする。

「TPの底が見えた」

TP……ティッシュュポイントのことだ。

「ティッシュュまだある？」

私は箱ティッシュュの持ち主であるミッシーに問うた。ミッシーはティッシュュ箱を確認して驚愕に目を丸くする。

「うつそ、もうほとんどない！？」

「……リーダーが人のだからって遠慮せずに使うから」

ダビの指摘にリーダーは口笛を吹きながら先へ進んでいった。

「どうかでTP補充しないとまずいんじゃない？」

「俺らはSPもやばいけどな<sup>サイフポイント</sup>」

そこは旅行前に補充しどけよ。

### 白池地獄

白濁した池と熱帯魚館が併設されたこの地獄は、魚好きの私にとっては八つの地獄のうち最も楽しみにしていた場所だ。

「TPが尽きたああツ！？」

ついにやってきた本当の地獄。命名、鼻水地獄。

私はゆっくり鑑賞していくのに、リーダーとミッシーの歩く速度がめつさ速い。

ふとリーダーがトイレに立ち寄る。私も連れ立つてトイレに入り、それを目撃した。

リーダーがトイレットペーパーを拝借していた。それも丸ごと一個。

「いやいやいや、あかんて！ それあかんて！」

流石に持ち出すのはまずいと思い私は止めた。これ窃盗になるんじゃない？ という考え方で、トイレットペーパー片手に観光する友人の滑稽な姿が脳内を駆け巡る。

しかしリーダーは

「TP補充するまでやで」

ともうなくなりかけのトイレットペーパーを持つトイレを出した。アレならこの地獄内で使い切るだらうから問題は……いやあるんじやないかな？

「君たち、血の池はもう行った？」

白池地獄からの下り道を歩いていると、タクシーの運転手が親切にも声をかけてくれた。

が

「TPないんでもう無理です！」

「薬局までお願ひします！」

とは流石に言えず、丁寧に断つて近くで見つけたコンビニに突入した。

コンビニでヨツシードダビッシュPを増やし、そして箱ティッシュを五箱セットで買った。この時はそんなに必要ないだろ、と思つていた私だが、先に言うと旅行が終わつた時このティッシュは残り一箱だつた。

結局、TPを満たしても血の池と竜巻には向かわず、私たちはホテルへと直行した。

> 20911-2084 <

ホテルに着くと、代表者である私がチェックインを済ませた。リーダーはリーダーのはずなのに、なぜ私が代表者？ どうしてこうなつたのかさっぱりわからない。

広々とした四人部屋へ案内され、そこに荷物を置いてから第一回

『これからどうするか?』会議を開催する。

夕食のバイキングは十九時。まだ一時間ほど余裕がある。

「プール行こう、温泉プール」

リーダーが言う。このホテルには水着着用で入る文字通りの屋外温泉プールがある。

用意のいいリーダーはちゃっかり自分の水着を持参していたが、私たち三人にはそれがない。四百円でレンタルし、さつと着替えてプールへ向かう。

プールと言つても温泉である。泳いでいる人よりもただ浸かっている人の方が圧倒的に多い。そんな中で、

「ヒヤツホーイ！」

クロールをし始めるヨツシー。ちゃんと周りに人がいないことを確認しているから迷惑はかからない。

それにあつちで外国人の集団が注意されそうなほど楽しげに大騒ぎしているので、周囲の目はそちらに向いている。泳いだところで恥ずかしいことなどなにもない。プールだし。

水圧のマッサージを満喫しているリーダー。それぞれがそれぞれに楽しんでたが、ダビだけは「……スライダーのないプールなんてありえない。もう出てもいい?」みたいなことを言つていた。無論、却下である。

一時間ほどプールで遊んで、一度部屋に戻った。  
まだ夕食まで時間はある。

「ゲーセン行こう、ゲーセン」

ということで我々は浴衣に着替え、温泉プールまでの道をほとんど引き返してゲームセンターに向かつた。

「……エアホッケーしません?」

私はダビに誘われる。そういえばエアホッケーの台を興味深そうに見てたな。無論、ここで断る理由はない。

エアホッケーなんて十年以上やってないけど、まあ、手加減なん

てせずに全力で点取つてやるのぢやないかっ！

五対四。

私の負け。ダビに負けるなんて非常に悔しい！でも、もう一度挑戦するほどむきになつてはいないため一回で終えた。

ヨッシーは銃でゾンビを撃ち殺しており、リーダーは迫りくるサメをハンマーで叩いている。ダビは知らない。いつの間にか姿が見えなくなつていた。

私はクレーンゲームでチョコを一つゲット。ゲーセンとはほとんど縁のない私は、そのくらいしかやってもいいくと思えるゲームがなかつたりする。

そんなこんなで時間は過ぎ、私たちは夕食のバイキングを堪能して部屋へ戻つた。

皆けつこう疲れている様子だったが、あるものは使おう。  
「せつかく割引券あるんだから、ボーリングしよう、ボーリング」「……おれは卓球の方がいい」  
「「よーしボーリング行こうぜー！」」

満場一致で可決。うん、誰も反対なんてしていない。

私たちは浴衣のままボーリング場へと赴いた。見渡す限り、他の客は誰一人浴衣など着ていない。だよね、これ動きにくいし。どうして着替えなかつたんだろう？

靴を借り、ボーリングの球を選んで指定されたレーンの場所へ行く。

一番手はヨッシー。浴衣の動きにくさを全く感じない動作で投球。微妙に軌道がずれて一回の投球で三本残つた。

二番手はリーダー。一発でストライクを出しあがつた。

そして三番手は私。実は最近ゼミの追いコンでボーリングをやつたばかりなのだ。勘は取り戻している。第一レーンでストライクか

スペアは余裕

なぜ……ピンが七本も立っている……？

おかしい。ダビがそれなりの本数を倒しているのを目に私は冷や汗を流す。

そうか、まだ体が温まつてないからだ。私の特性はスロースタート。追いコンの時たつて第六レーンから覚醒したのだった。それまではガーターが続いていたが、今回はそれだけは回避している。調子は前回よりもいいはずだ。

それから五ターン経過。

「よし！」

私はようやく調子を取り戻し、このレーンで初めてスペアを出した。

しかし、得点を表示している画面を見ると皆との差が倍近くある。ま、まあ第一ゲームはこんなものだ。第一ゲーム以降に私は鬼のような強さを見せるのだから！

親指の爪が割れた。

爪切つとけばよかつたあああああああああああああああッ！？

しかし時既に遅し。私は爪が割れたことを皆には隠し、その後のレーンを投げ続けた。そして第八レーンにしてわかつたこと 没衣の時は助走しない方が安定する。

皆疲れていることもあって、ゲームは一回で終了した。私が本領を発揮するのは第二ゲームからだが、あくまで第二ゲームからだが、爪が割れてるから仕方なく終了に異を唱えなかつた。

その後、プールではない温泉に入つて汗を流し、私たちは部屋に戻つて消灯した。

?

～一日目～

皆で旅行したりする際、私には致命的な欠点が存在する。それはすばり、？寝れない？こと。

枕が合わないとか、ベッドじゃないとダメだとか、隣のベッドで寝ていたダビのイビキがありえないくらい酷かつたとか、そんな理由からではない。

人がいる。それだけで私は無意識に睡魔に対するプロテクションを貼りつけるのだ。

子供の頃から眠る時は異常なまでに神経質になるため、たとえ家族であろうとも同室で私は安眠できない。眠っていても、他人が寝返りを打つ時の衣擦れの音だけで目覚める自信がある。昔の知り合いに『前世は忍者か！？』と言われたほどだ。いやホント。なぜこんな体質（？）の話をしたかといふと

「夙さん、ちゃんと眠れた？」

「おかげさまでパツチリ」

「寝てないやん！？」

気遣つてくれたリーダーに元気よくサムズアップする私は、  
これでも徹夜です。激しく疲れていたにも関わらず、貫徹しちゃいました。

三時頃までは持つてきたラノベを熟読し、そこからはベッドで眠

れないまでも瞑目してました。目を閉じるだけでも七十パーセントくらい効果あるらしいし。

その証拠というか、四時過ぎにダビの無意味に流していたウォークマンの曲が止まったことを知っています。ダビさん本人も途中で起きて止めたと証言しています。

「俺ライビキかいてた?」

ヨッシーが訊いてくる。彼らは皆、私が寝れないことは承知しているのだ。

「いや、全然。もしかしたら彼のイビキに搔き消されて聞こえなかつただけかもしれんけど」

「……おれ、そんなにイビキ酷かつた?」

「起きてる方が静かなくらい」

「うわあ、今日は博多のホテルで一人部屋だけじ、こいつとは一緒にりたくねえ」

「あとで部屋割りを大富豪で決めようや」

そんな感じの朝を過ごし、私たちは朝食を済ませてチェックアウトした。

ザ・ノーブラントラベル。

一日目も無論それだった。博多行のバスを予約しているが、その時刻は午後四時。それまでの時間の使い方を第三回『これからどうするか?』会議を開いて決める。

本来は温泉めぐりをしようという話だったのだが、温泉に入つてわかつたことなんだけど、何ヶ所も巡つてたら疲労が深刻になりそうじゃない?」

「あー…… そうやな」

私の意見に一番ノリノリだったリーダーが悟ったような表情で首

肯したことで、温泉めぐりは廃案と化したのだった。

「テキトーに集合場所決めて、時間まで解散するつて手はぢう?」

ヨツシーの提案に私はこう答えた。

「そうなら私は駅でノーパソ開いて執筆し、電池切れたらラノベ読み耽るよ?」

「よしダメだ。それはダメだ。たとえ解散しても夙くんは俺と一緒に回りう?」

なんとも頼もしい言葉だが、私は知らない街を目的もなしに散策する性格ではない。

「テキトーに街回つても息切れするつて。だつたら水族館にでも行つた方がよくな?」

「私、魚好きだし。よくない? と訊いておきながら、心中では物凄くプッシュしていたりするのは秘密。

「いんじやない? 駅からバスで十五分程度だし」

リーダーの後押しもあつて、我々は水族館へと進路を設定した。

「水族館に到着」

内心ウキウキしながら私は館内に入り、チケットを受付のお姉さんに渡す。そして一つ一つの水槽をじっくりと堪能しつつ

早い早い早いよ進むのリーダー!?

花粉症は昨日ほど酷くはないように見えるのに、リーダーはサクサク進んでいく。まるで私の母親みたいだ。

今日もティッシュ箱装備のヨツシーが彼に追いつく。リーダーもTPがなくなると死ねるからね。

「まあ、あんまりゆっくり見てるほど時間もないか

「……そうだね」

ダビと顎きを交わし、私もリーダーのペースで見て回ることにした。

海水魚、淡水魚、様々な魚たちが彩る館内を歩き、丁度よかつたのでちよつとしたショーも拝見した。

ラッコやアザラシなど海に住む哺乳類の区域に入り、そろそろ終わりが近づいてきたと実感したところで

リーダーが迷子になつた。

見失つた場所は通常の順路と、イルカショー等が行われる上階への階段の境目だ。

「確かに階段上つたと思ったのに」

彼を最後に叩きしたコッキーの証言である。全てのTOPはコッキーが管理しているので、早くしないとリーダーが鼻水地獄に落ちてしまう！

と思つてゐるが、私たちは特に慌てることなく普通に順路を巡っていた。リーダーも子供じゃないんだから、そのうち見つかるだろう。

我々はイルカの水槽の前にやつてきた。

どつかのおじさんが水槽に手を入れてそこに浮かんでいたビーチ

ボールをイルカの前に押し出した。

すると、ローンとイルカがそれを弾く。

おお！ と感嘆し、私もやってみた。

イルカ、無反応。

「そここのキミ、危ないから手を入れないで」

「すみません」

しかも私だけ注意された。ここすぐ前が魚に触れられる区域だったのだが、イルカのところには『危険なので手を入れないでください』と張り紙がされていることに今気づいた。

少々気分を害したが、リーダー探しを再開する。

拍子抜けするほどすぐに見つかった。彼はセイウチをぼーっと眺めていたのだ。

「どう行ってたん？」

「普通に順路回ってたけど？」

「あれ？ じゃあ上に行つたように見えたのは俺の気のせいか？」リーダーが迷子になつたのはヨッシーのせいだった。

その後、タイミングよく始まつたセイウチのショーを見て、我々はお土産コーナーへと入つた。

そこで私はある物を発見し、リーダーにそれとなく見せる。

「オウ！ クラーラ」

ミズクラゲのぬいぐるみである。これがまた某少女漫画に登場するマスコットキャラにそっくりだったのだ。

「俺、買つわ」

ヨッシー殿がお買い上げ。なぜ買つたし。

昼食にたこ焼きを食べた我々は、そのまま水族館の向かい側にある高崎山へと歩を進めた。

高崎山には野生のニホンザルを餌づけした動物園があることで有名だ。

しかし、入園前に問題が発生した。

「ビニール袋とかティッシュの箱は持つていると盗られるので、あちらのロッカーに仕舞つてください」

まさかのTPO固定エリアだった。

この時点では誰もポケットティッシュを持っていない。花粉症が深刻なリーダーとヨッシー、大ピンチである。

「まあ、なんとかなる。行こう」

それでもリーダーは果敢にも入園する。モノレールに乗るという手もあつたが、我々は自らの足で山を登ることにした。

分かれ道があつた。のんびり進むカメコースと、サクサク進むウサギコースだ。

「どつちに行くかグッパで決めよう」

リーダーの提案に賛成し、四人輪になつてグーとパーを出し合ひ。結果、私とリーダーがカメコース。ヨッシーとダビがウサギコースとなつた。

「どつちが速いか競争しようぜ」

そうはにかむヨッシーに、

「じゃあウサギコースは一時間くらい昼寝しろよ」

と私が言い返したところで二手に分かれた。

競争と言われても大して急ぐこともなく私とリーダーは歩いていく。

「サル全然おらんやん いた！？」

二ホンザルの子供を見つけてガチでビビるリーダー。

「うつそ、放し飼いやん！？ てつきり檻にでも入つてるもんと思つてた。どうしよめつちや ハーーーー！」

「いやここはサル野生だから」

軽くツッコミを入れていると、ウサギコースとの合流点が見えた。ヨッシーとダビは今着いたようだ、どちらを選んでも大差ないことがわかつた。

そこいらにサルの糞という地雷が散乱している道を我々は進む。ダビが見事に踏んでいたのは見なかつたことに はしなかつた。言つてやつたさ、はつきりと。

上に行けば行くほどサルがいる。人間慣れしているためか、全く驚いたりはしない。

「めっちゃサルあるし！？」

相変わらずリーダーは過剰に反応していた。

広場に出ると、これまたタイミングよく餌やりが始まった。係員が餌の入ったバケツを持つだけで各地からサルが集合してくる。我先にと小麦の餌を拾い集め、時には奪い合い、喧嘩を勃発させる凄絶な光景には皆が息を呑まざるを得なかつた。

餌やりをなぜか一回も見て満足した我々は、博多行のバスの時刻も迫つてることもあり山を下りることにした。

「博多……めちゃくちゃ雨降つてますけど! 別府はそこそこ晴れてたのに!」

一時間半ほど高速バスに揺られて博多に到着した我々は、雨の中歩く気にもなれず、西天神からタクシーを利用して予約していたビジネスホテルへと向かつた。

やつぱり代表者となつていた私がチェックインを済ませ、部屋のある六階までエレベーターで登る。

今回は一人一部屋である。だが、我々は分散することなく、片方の部屋に集まつていた。

「部屋割決め大富豪すつぞー!」

本来なら今日の朝、ホテルをチェックアウトするまでにやるはずだつたことを思い出したかのように始める。あの時は私以外の全員が一度寝タイムに突入したためできなかつたのだ(寝れない私はラノベ読んだり執筆したりしてました)。

勝つた二人と、負けた一人という具合に部屋が割り当てられるというルールだ。

デュエリストのヨッキーが手慣れた感じでトランプをシャッフルし、皆に配つていく。

私の手札にはジョーカーが一枚と、ハートの3から6までの『階段』ができている。ダブルやトリプルはほとんどなかつたけど、そ

「まで悪くない手だ。

ジャンケンで先行を決める。私・ダビ・リーダー・ヨッシーの順になつた。

「4のダブル」

「……妥当な手だね。……7」

「それじゃあ10」

「俺はバス」

「バス」

順調に不要なカードを処理していく私。このKで流れたから、9を出して2で再び私のターンに持つていけば階段革命で一気に勝負をつけられる。フツフツフ、完璧な計算

「クローバーのAで縛りな

……。

ちょっと待つてリーダー。え？ なに？ 縛り？ クローバー？ 手札を見る。私の2は……クローバーじゃない……だと？ ジョーカーを出すか？ いや、まだ早い。ここは様子を見て次のチャンスを掴めばいい。

「――バス」

「んじゃ革命

「マジで！？」

どうしよう、早速計算が狂つた。

いや、まだた。まだこちらにはジョーカーがある！ そして革命し直せば流れを取り戻すことは可能！

「4」

「来た！」 こだ！

「ジョーカー」

「スペ3返しつと」

リイイイイイイイイイダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツ！？

ジヨーカー様を無駄死にさせた私は、3～6の階段を単体で出していくしかなくなり、結果三番目で上がることとなつた。ダビに勝つことで自尊心は保つたが、負けていよつとも彼と同室になることは変わらない。

「負け組は大人しく隣の部屋に移動しろ」「リーダーの腹の立つ笑みを背中に、私とダビは部屋を追い出されるのだった。

## 第四回『いれからじつするか?』会議

は、今回ばかりは会議にすらならなかつた。

一屋台行こう、屋台

豐國と北山の屋敷

五二四  
五二五

かく、三三の御用達は、二枚共、はらう。

ホテルの従業員が集まる所と、

ホテルの従業員に屋台が集中している場所と行き方を聞き、我々は屋台で食べるラーメンの味を想像しながら雨の中を意気揚々と歩いた。

屋台は河原に集中しているようだった。

我々はまず一通りの屋台を見て回り、どこに入るかを検討し

おぬかで とくを おいじいよ

屋台なのでどうしても狭い」とは否めないが、それでも充分なゆ

とりがあった。

四人並んで椅子に腰かけ、同じとんこつラーメンを注文する。六百円と良心的な値段で味もじつたりし過ぎず、せつぱり好きの私としてはけつこう好みだった。

実はバスの中でエクレアを間食していたので、この一杯で私の胃袋は満足してくれた。

「じゃあ、コンビニ寄つてからもう一軒行こうや」

「あ、やつぱまだ食うんだ……」

そんな流れで、一軒目の屋台で焼きラーメンを食べた後だった。

「……俺、ちょっと親戚の家に挨拶しに行つてくる」

ダビが唐突に言い出した。

彼の親戚とやらが福岡に住んでることとは旅行の直前で知らされていた。挨拶に行くといつも事前に聞かされている。

でも、今か？ じのタイミングか？ 夜、それもみんなで屋台巡つている途中ですることか？ てつくり明日の未予定の時間に捻じ込んでくるものだと思つていた。相も変わらず思考が読めない。

「どうぞ」

「こつてらつしゃい」

「どうやつて行くん？」

「……タクシー捕まえて」

皆、冷たいのか寛容なのか、誰も引き留めはしなかつた。じつでなければ彼と付き合つことは難しいだろう。

「もし彼が親戚の家でダウンしたら、今日は安眠できるな」

ダビが夜道の向こうへ消え去つたことを確認してから、私はぼそつと呟いた。

「いや流石に帰つてくるやん」

「でも、もしかしたら夙くんを気遣つて親戚の家に泊まると言い出すこともあり得るな」

ヨッシーの言葉に私は、まさか、と首を振った。あのダビがホテル代を無駄にしてまで人を気遣う優しさを持っているとは考えにくい。……散々否定してるけど、別に私はダビを嫌っているわけではない。勘違いしないように。嫌いなら一緒に旅行なんて行かない。雑談もほどほどに、残った三人でもう一軒回ることにした。

ちなみに、昼になにも食べなかつたヨッシーはラーメンを合計三杯完食していた。

そして、ダビは二十三時過ぎにホテルへと戻ってきた。

?

～三日目～

皆まで言うな。そうさ、徹夜さ。

いや、寝たかもしれない。……寝た。うん、たぶん寝た。五分くらい。夜の記憶全部あるけどね！

一日程度の徹夜ならばなんてこともない私ですが、一日はちょっときつい。睡魔に対するプロテクションはまだまだ剥がれそうにないけれど、流石に少し休みたい。

だから朝食後、一時間の仮眠タイムを貰つた。ダビはリーダーとヨッシーの部屋に行き、こちらの部屋の鍵を自分で所持することでの安眠が可能となる。

おかげで万全に近い状態まで回復した。さてこれで楽な気分でチヤックアウトができるつてものである。私は元気凛々と友人たちの部屋へと向かい

三人共一度寝タイムだつたことを知る。どうやら私とは種族の異なる存在らしい。

「で、今日はどうすんの？」

私から始まる第五回『「これからどうするか？」会議。

「お土産とか買つんやし、テキトーにブラブラすればええんぢやうん？」

「いや、それはダメだ」

リーダーの意見にヨッシーが反対する。

「そうすると夙くんが

「イエス、博多駅で新幹線の時間まで執筆＆読書つてことになる」

「そ、それはいかんな」

「……昼飯はこのステーキハウスに行こうよ」

ダビが親戚の家でプリントアウトしてたらしい紙を掲示する。  
昨夜少し話を聞いた限りでは、そこで彼の親戚がアルバイトをしているようなんだ。そしてアルバイトしている親戚には昨日会っていないので、昼飯がてら顔を見せに行きたいということだろう。

「そこいつてどこにあるん？」

「……このホテルから歩いて十分もかからない」

昼にはまだ時間あるし、近過ぎるのも少々困る。

「まず博多駅のコインロッカーに荷物置いて、徒步でその店を目指しながら街見て回ればええやろ？」

「なるほど、他に食べたいものがなければそのステーキハウスに行けばいいってことか」

「そ」

リーダーのおかげで話は纏まり、会議終了。

結局、ランチはステーキハウスだった。

各々が別々のメニューを頼む中、ダビが親戚らしい青年から「つ  
そり五千円札を渡されているところを私は見た！」

いやまあ、別になにも悪くないけどね。オーバーズカイ貰つへり。

食事を終えた我々は、博多にある複合商業施設で残りの時間を潰すという強引な作戦に出た。

施設内は迷子になるほど広い。地図を入手したが「ひやひやしていて現在位置すら掴めない。」

「博多駅方面の出口に三時半集合な」

そんなわけでここでは皆がバラバラに行動することとなつた。この施設から出られない以上、私の『駅で執筆＆読書計画』は成り立たない。考えたな、リーダー。

だが残念。ここにだつて休憩するためのベンチの一つや二つはあるはずだ。そこで時間までずっと執筆して荷物は全部駅のロッカーだつたああッ！？

万事休す。私はとりあえず本屋に向かうべく、目的地の方向が同じヨッシーと途中まで行動することにした。

「いやあ、自分の興味のあるものつてすぐに見つかるよね」

と地図の一部分を指差すヨッシー。そこには『カード 玩具』というキーワードが見えた。流石『デュエリスト』だ。集合時間まで居座りそうだな。

かくいう私も人のことは言えない。興味あるもの 本屋の位置は即行で掴んだ上に本屋ならこつまででも滞在できる自信がある。

ただ、足が痛いんです。歩き過ぎで。立っているだけでもきついので本屋と休憩を繰り返し、途中で今週のマンガ雑誌を読んでいいことを思い出して外のコンビニへ入る。複合商業施設とは道路を挟んだ向かい側だから出ても問題ないはずだ。

立ち読みも終了し、施設に戻つて適当にお土産を買つ。

そうするといふことがなくなつたので、誰かを捜すこととした。いや、捜すまでもない。ヨッシーはカード売り場にいるに決まつている。そう考えて私は地図を見ながらその場所へと痛い足を動か

す。

案の定、コツシーはいた。彼はなにやらガチャガチャらしきもの前にいる。

と思つたら彼だけではない。リーダーとダビも一緒にないか。なんだよ、結局三人で行動してたんかい。

「おわつ！？」夙さんいつの間に

「たつた今」

気配なく背後から近づいた甲斐あつてリーダーが驚いてくれた。うん、それだけで満足。時々やりたくなるよね、こいついうお茶目。「……夙くんはずっと本屋にいると思つてた」

「流石にずつとはいひないつて」

失敬な。既に同じ本屋に三回ほど入つてるけど。本屋以外は土産屋しか入つてないけど。

「ならどこ行つてたん？」

「……こ、コンビニで立ち読み……とか？」

田を逸らしながら答える私。やっぱり本関連ですすみません。

「あ、俺も立ち読みしてないわ。ちょっと行つてくる」

とコツシーが言い残して去つていく。せつかく集まつたのに、またバラバラに行動するはめになつたのだった。

お土産も買つた。

ロツカーに預けた荷物も回収した。

最後まで私が管理していた切符を皆に渡し、改札をくぐつた。行きの時みたいな問題は発生しなかつた。

新幹線に乗つた。

私は旅を名残惜しむように窓の外に流れる景色を眺めることは一切なく、先程本屋で買った最近アニメ化しているミステリー系の漫画を全力で読んでいた。そこは原作小説の方がよかつたけど、

積み小説の溜まっている私にはとても手が出せなかつたのだ。

新幹線が駅に到着し、旅が終わる。

「晩飯、どうする？」

と訊いてくるヨッキーに、私が答える。

「どうか食いに行こうか。ていうか、新幹線の中で駅弁食つてた人いるけど」

私はダビに視線を投げる。彼は特に嫌そうな顔はせず。

「……行くなら行く」

とだけ言つた。

「リーダーは？ 電車の時間とか大丈夫？」

「あー、ま、大丈夫やろ」

と一度は賛成したリーダーだったが、

「いや、やっぱ帰るわ」

帰りの電車の時刻が近いことから、彼は帰宅を選んだ。

「了解、また卒業式で」

「うい」

リーダーを見送り、我々は駐輪場の方向へと移動する。とそこで、ダビがいないことに気がついた。

「あれ？ どこ行つた？」

「あ、あそこ」

私が指差した先に、なにやら携帯で電話しながら反対方向へと歩いているダビがいた。

「どこ行つてんの、アレ？」

とりあえず彼の後を追うヨッキーに続いて、私もダビを追いかけ る。それにしても足が痛い。

駅から出たところでようやく追いついたヨッキーが事情を聞く。

「……リーダー帰つたから、メシの話はなくなつたのかと思つたつまり、ダビは勘違いして別れの挨拶すら言わずに踵を返したつ

てことのようだ。まつたく、彼はいつもワケガワカラナイヨ。誤解だつたことがわかつても、ダビはそのまま帰つてしまつた。今更引き返したくない気持ちはわからないでもない。

仕方なく私はヨッシーと一人で夕食を取り、大荷物を抱えて駐輪場に向かう。

「最初から最後まで彼はやつてくれたな」

ヨッシーが言うのは無論、ダビのことである。

「この旅行のことを小説化したらアレが最後のオチになるのかねえ」なんて話をしているうちに駐輪場へ到着する。駐輪料金を支払い、自転車を止めた位置に行く。

私はポケットに手を突っ込み、自転車の鍵を……。鍵を……。鍵を……。鍵を……。

「ははは、これで鍵失くしましたとかになつたらやばいよな」

ヨッシーの冗談のつもりの言葉が、冗談ではなくなつた。

「あつ、鍵どつかに忘れた……」

(後書き)

書きたかったから書いたって感じですね。旅行の思い出を自分の好きな形で残せるようについて。それだけです。読んでくれた方、つまらなくてすみませんでした！！ oren

イラストは「」んたろうさんには書いていただきました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4489r/>

---

ノープラントラベル

2011年10月8日16時07分発行